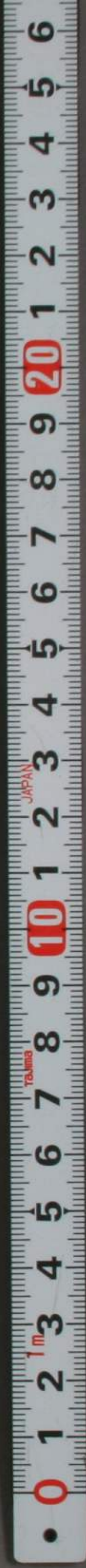




13  
2109  
8





13  
2109  
8

萬弥



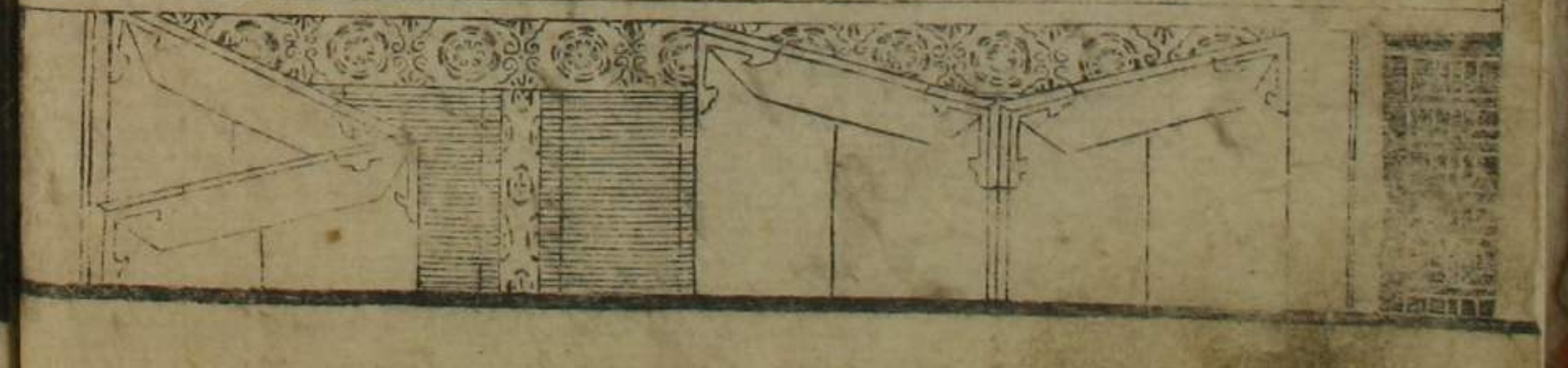
又思ひもつゝ今<sup>これ</sup>の渠<sup>のど</sup>が望<sup>のぞ</sup>み成<sup>な</sup>り叶<sup>な</sup>はる事<sup>こと</sup>に誓<sup>ちか</sup>願<sup>ねん</sup>満<sup>まん</sup>ざるとも有<sup>あ</sup>るが如<sup>ごと</sup>とて  
 已<sup>ま</sup>むと得<sup>え</sup>まふも其<sup>その</sup>を任<sup>ま</sup>せ全身<sup>ぜんしん</sup>の瘡<sup>かさ</sup>と吐<sup>す</sup>ひ膿<sup>うみ</sup>を吐<sup>つ</sup>頂<sup>たか</sup>より踵<sup>かかと</sup>の小<sup>こ</sup>さまで  
 吸<sup>す</sup>出<sup>で</sup>しひれぬ癩<sup>しかん</sup>人<sup>にん</sup>を憐<sup>あは</sup>れ色<sup>いろ</sup>もわく其所<sup>そのところ</sup>よ此<sup>この</sup>所<sup>ところ</sup>よと指<sup>さし</sup>揮<sup>な</sup>と吸<sup>す</sup>せしむり  
 噫<sup>あ</sup>愉<sup>う</sup>快<sup>かい</sup>うお皇后<sup>こうごう</sup>の御<sup>み</sup>恤<sup>あは</sup>れ小<sup>こ</sup>て我<sup>わが</sup>多<sup>た</sup>年<sup>ねん</sup>の病<sup>やまひ</sup>瘡<sup>かさ</sup>ぬむとと怡<sup>よろこ</sup>び多<sup>おほ</sup>く太后<sup>たうごう</sup>癩<sup>しかん</sup>人<sup>にん</sup>  
 小<sup>こ</sup>向<sup>むか</sup>ひ妾<sup>めかけ</sup>大<sup>だい</sup>願<sup>ねん</sup>あつて你<sup>あなた</sup>が癩<sup>しかん</sup>瘡<sup>かさ</sup>の汚<sup>けが</sup>穢<sup>けが</sup>を厭<sup>いと</sup>む望<sup>のぞ</sup>のどく垢<sup>か</sup>をとり膿<sup>うみ</sup>と吐<sup>す</sup>  
 得<sup>え</sup>まふより元<sup>もと</sup>賢<sup>けん</sup>此<sup>この</sup>更<sup>さら</sup>をうく人<sup>ひと</sup>小<sup>こ</sup>瘡<sup>かさ</sup>る更<sup>さら</sup>かま<sup>ま</sup>と宜<sup>よろ</sup>ひれぬ癩<sup>しかん</sup>人<sup>にん</sup>寺<sup>てら</sup>癩<sup>しかん</sup>人<sup>にん</sup>の  
 大<sup>だい</sup>慈<sup>じ</sup>悲<sup>ひ</sup>心<sup>しん</sup>を何<sup>なに</sup>と人<sup>ひと</sup>小<sup>こ</sup>瘡<sup>かさ</sup>に死<sup>し</sup>但<sup>ただ</sup>一<sup>ひと</sup>皇<sup>こう</sup>后<sup>ごう</sup>も阿<sup>あ</sup>閼<sup>くわつ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>の瘡<sup>かさ</sup>と吐<sup>す</sup>うと必<sup>かならず</sup>ま<sup>ま</sup>と人<sup>ひと</sup>小<sup>こ</sup>  
 結<sup>むす</sup>むと勿<sup>な</sup>ま<sup>ま</sup>と言<sup>こと</sup>も敢<sup>あ</sup>てか心<sup>こころ</sup>ち大<sup>だい</sup>光<sup>こう</sup>明<sup>めい</sup>を放<sup>はな</sup>ち今<sup>いま</sup>も癩<sup>しかん</sup>人<sup>にん</sup>と見えし妙<sup>めい</sup>相<sup>さう</sup>  
 端<sup>たん</sup>嚴<sup>げん</sup>の金<sup>きん</sup>色<sup>しき</sup>の佛<sup>ぶつ</sup>と化<sup>け</sup>靈<sup>れい</sup>光<sup>こう</sup>四<sup>し</sup>方<sup>ほう</sup>小<sup>こ</sup>童<sup>どう</sup>も虚<sup>こ</sup>空<sup>くう</sup>を臨<sup>のぞ</sup>んで起<sup>た</sup>去<sup>さ</sup>るひ  
 后<sup>こう</sup>大<sup>だい</sup>小<sup>せう</sup>發<sup>はつ</sup>たのひ偕<sup>い</sup>々<sup>々</sup>女<sup>にょ</sup>が信<sup>しん</sup>心<sup>しん</sup>の程<sup>ほど</sup>を弑<sup>ころ</sup>しむらんあ阿<sup>あ</sup>閼<sup>くわつ</sup>如<sup>にょ</sup>来<sup>らい</sup>後<sup>ご</sup>小<sup>せう</sup>癩<sup>しかん</sup>人<sup>にん</sup>とあつて  
 景<sup>けい</sup>降<sup>かう</sup>させのひかりと隨<sup>ずい</sup>喜<sup>ぎ</sup>の涙<sup>なみだ</sup>と流<sup>なが</sup>るひ大<sup>だい</sup>願<sup>ねん</sup>成<sup>じやう</sup>就<sup>じゆ</sup>せりと脚<sup>あし</sup>散<sup>さん</sup>喜<sup>ぎ</sup>浅<sup>せん</sup>らむと



宮中へ歸らせりて上皇當今も御物語ありたれども俱も御感懐在り  
斯て浴室の地小伽藍を建立あり阿闍寺と号すひる。其後太后天平室  
字四年六月小脚年六十才中崩す。則ち大和國佐保山なる聖武天皇の御  
陵小並んで葬まされり。且詔天平室字四年三月詔命あつて本朝小錢と  
以て世の交易を便むる更己小年久く公私とも益ある更是小勝る物なり。茲  
小近頃私の利を貪る族より小錢を鑄く先朝の掟を犯し偽濫の錢公の錢  
の半小過る。是甚く曲更あれども俄小是を禁断せむ諸民強を擾るること  
有るを改めて新錢を鑄て旧錢と並用せむ。然る民小損あり。國  
小益有る。則ち鑄錢司小命令られ新錢を鑄さしめひる。其新錢の  
文を萬年通寶といひ此一錢旧錢の十錢小當る。又銀錢の文を太平元寶と  
いひ此一錢新銅錢の十錢小當る。又金錢の文を開基勝寶といひ此一錢銀

錢の十錢小ありたり。已小新錢世小流布して通用愈自由小なり。凡  
民大小悦伏し。凡錢の貨する更其理甚く世小益あり。然るも是と用る小  
橋客の失有て。錢の理小悖る時及て其身と害する更之なり。李之彦  
が謂る更あり。錢の字の旁小上小一の戈の字と著し。下小二の戈の字と著すと  
之ハ人を殺すの器なり。錢中橋て之小是を費し。各んで遣つて後小積りたか  
皆却て其身と害する更之の人を害するといひ。因て錢の字小二の戈の字と  
用ひたり。宜あらず。其論錢よりといひも無益の橋小費し捨る時。送小  
貧人と成て凍餒の害と免まむ。溜る成善とのを思ひて用ひたれども用ひ  
絶たぬれども吝して貸施まむ。後小積貯て守錢の奴とたれど。汝血賊。是を  
人爲小其人と害を。錢ハ只其宜小後て用ひたれど。却て身と害すること多  
し。噫大なるか。錢の利害ある更慎む。恐るるなり。







弓削道鏡乱宮中

惠見押勝滅亡之吏

于時天平宝字五年都大和國保良の郷小遷され百官緒民多々新都小  
 移り住らる。然上皇高野皇宮位を太子大女小嬢おつりひひ名斗なむ小お攝朝政しやくちやう  
 自執行ひひひ。新帝の御心小任せむと。且かつ小嬢おつ配あはの御行迹甚おじく。惠見押  
 勝おしとか昼夜御側小侍しやうやごしやうのお猥わづがられは吏限しりありはれは三さん公こう九く卿けいのお手て小汗握あせをつと  
 世よと危あやまれる時とき亦また一ひと層そうの憂うれひ増まる。其故そのゆゑ丹波國たんぱのくにの僧そう小道鏡みちかがみといはる者ものあり  
 其俗姓そのよこな弓削氏ゆげうぢなり。此法師このほふしやう身小濟世みよせの徳とくもたく只ただ奸佞けんねい有あるを小生質せいしやう  
 世よ小稀まれなる大陰おほいんの者ものなり。是こゝろ年としの冬ふゆ大内おほうち御修法ごしゆほふの吏しあり。彼道鏡かのみちかがみも衆しゆ  
 僧そう小雜まじりてお内うち小續つづ経きやう一ひと々た高野皇たかののきみ道鏡みちかがみといひて御み目め小おとすり。彼法師かのほふしやうと  
 召よせと帳内ちやうない入いりひ度たび道鏡みちかがみといひて内うち小お誘よひひてすり。大おほ小御ご意い小適たひ其下したり  
 之この佛ぶつ吏し小吏し上あせてお宮中みやちゆう小田置のちだぢひひ昔時むかしも御側ごしやうを離はなしむとは大禪師おほぜんしのおははせ

授けひひ御ご電でん愛あい限げんりありはれ。道鏡みちかがみ君きみの御電ごでん遇あひ逢ひて身みと橋。我意がいの  
 行条かうじやう頗おほるまりり。當今とうきん甚おほくはれは吏し小上皇かみかみと時とき御ご辣らありはれ。高  
 野皇露のきみつゆもも用もちひむとは却かへてお新帝あらたみと疎ひひ是こゝろ二ふた帝みの御中ごちゆう不ふ和わ成じやう  
 御睦ごむつとはれ。新帝あらたみ日都ひつとの平城へいじやう還幸えんしやうあり。是こゝろ依よてお高野皇たかののきみとはれ  
 維い悼たうらむとはれ。道鏡みちかがみとはれ。日夜にちや嬉うれしくなり。御電ごでん愛あいひひ吏し甚おほくはれ。世よ上かみ未なくはれ  
 までお龜歌かめうたしてお其風説そのふうせつ喧うらられはれ。流石まさか高野皇たかののきみもも世よ人ひとの嘲あざわりはれ。塞さんはら  
 日六年ひつとの夏なつ法華寺ほふけへいせひひ。御落飾ごらくしやく遊あそびはれ。法ほふ律りつとはれ。法ほふ基きとはれ。斯  
 飾しやくをお落おしひひ。道鏡みちかがみとはれ。嬉うれしくなり。御吏ごしとはれ。且かつ天下あまのくにの政まつりごとの中ちゆう小國こくに家  
 の大事おほいごととはれ。賞しょう對たいの二ふた新帝あらたみの御心ごこころの依よりはれ。小惠こゑとはれ  
 美押勝みおしははれ。追お其身そのみ入いりはれ。高野帝たかのみの御愛幸ごあいしやうとはれ。蒙ありて正一位せいいつゐ右大臣みぎのちやうじんとはれ  
 進まりはれ。推威威おしゑゑ小上越者かみこしえしやうなり。是こゝろ時ときもも道鏡みちかがみ法師ほふしやう上皇かみかみのおははせ



ちやうやぎやぎと去る。阿利使ひ多小。押勝ハ君電忽ち不義、脚前  
 遠避られて推柄漸次減じ。門前車馬の音も稀く。賄賂の使者も絶  
 く。成れど押勝嫉妬の焰心を焦して。大不憤怒リ。斯てハ道鏡が推威小  
 拉し。終ハ身小害と蒙る。如何もて彼を法師と誅す。高野皇を押  
 筆電我天下の権柄と掌小握らんとの心中小巧。天平宝字八年九月高野皇小  
 偽り奏し。兵を慣し。武技と筒筒と名とて。太政官の印を中世。其を以て  
 近國の軍兵を召集。潜小謀叛を企及と謀せんと。伎黨を多し。時節を  
 と。規ひ。小大外紀高丘比良。官と兼て。押勝の隠謀小荷擔し。多  
 身小害の及ん。及人吏と怖。依小愛心。押勝が逆謀の次第。遂小奏聞し。多  
 小高野皇大不驚。各小少納言山村王。小命。急。中官院の鈴の印を  
 取。山村王。勅命と奉り。中官院。地。到。鈴の印と。請取。て。出。小。押

勝斯と。まよ。二男。刻。儒。丸。名。を。呼。出。急。山。村。王。追。鬼。鈴。の。印。と。奪。取。と。命  
 小。刻。儒。丸。領。掌。私。馬。小。鞭。を。あ。て。追。つ。山。村。王。を。知。り。鈴。の。印。を。奪。取  
 我。郎。舎。と。引。返。山。村。王。印。を。奪。取。這。の。体。を。逃。帰。り。高。野。皇。小。大。の  
 次第。を。奏。し。され。上。皇。大。不。逆。鱗。存。火。急。小。坂。上。新。田。名。の。又。杜。鹿。嶋  
 足。小。命。と。刻。儒。丸。と。伐。り。多。是。小。依。て。西。將。官。軍。と。引。率。し。時。移。さ。と。刻  
 儒。丸。郎。舎。押。寄。声。小。勅。詔。を。と。刻。儒。丸。皇。居。へ。來。れ。と。呼。り。多。是。皇  
 音。小。天子。平。城。の。内。裡。小。在。せ。勅。命。と。六。維。が。命。を。と。詔。り。手。勢。小。下。知。し。て  
 守。兵。の。隊。小。伐。て。り。を。ぬ。森。於。て。西。軍。を。交。て。挑。戦。し。多。小。坂。上。新。田。丸  
 拔。群。の。勇。將。を。て。ま。も。強。弓。の。精。兵。が。五。人。張。の。弓。小。當。竹。の。矢。と。番。へ  
 刻。儒。丸。を。ね。ひ。克。言。て。切。て。殺。す。其。矢。過。と。刻。儒。丸。胎。拔。と。替。す。と。



射通しを以て堪を必死に死せり。是を以て列儒が  
軍兵も周障強が押勝が館へ逃るる。押勝列儒が討まし由を  
大の怒り將監八田部老を大将と。兵卒百五十騎を授け法花寺の皇  
居を襲ふも多し。八田部主命と領して即時小鎧一編し馬も乗軍勢  
前後小後へ蒐出を。此更早く中を京中の強動以外の外下と下  
る。上皇斯と食重と紀船守も百余人の禁兵を授けて敵と追拂  
る。船守奉り百餘騎と率とけ向ふも途中中て端かく八田部と行合  
ふ。船守氣早の武士たれ少くも猶豫も大音小謀逆不義乃押勝を  
佐る。眼物見人と大力拔埵し馬を進めて伐てり。八田部も  
はく馬蒐出して迎合せ。兩陣火花を散して戦ひ多し。船守が武勇勝を八田部  
を一刀斬り落し。残兵散る。敗走し八田部逃行る。斯て船守八田部

田上名牡鹿嶋足本と二隊なり。惣勢六百餘騎を。押勝が館を臨んで押寄  
る。押勝ハ列儒九八田部と討せて安らぎも思ふも不意に此後り。小路軍勢  
所経防戦叶えずとて。妻子残引果後門より出て免道なる。其身の知行  
所江州をきてとどろ落行る。是も依て後黨の軍兵も押勝の後残幕の行あり  
又已がさか。落行あり。官軍斯もも。押寄る。敵ハ早落せし  
空館かり。案小相違し。啼てりと奏し。即ち押勝が官位を削  
り藤原の姓を除け其館を破却し。器財雜具もも没収せし。昨日  
まで。君竜肩と雙る者。朝位を進め。多小官を増れり。今日ハ心も忘  
悪。追捕の軍勢をさ。向ら。更君も臣も。反覆表裏定め。浅猿を  
一世の中よ。情ある人。眉をひそめて。嗟嘆し。斯て軍卒も押勝が。橋  
本。専ら。殿宇を悉く。崩壊し。凱歌を揚げて。馳り。押勝



を追伐す。吉備大臣を軍師とす。山部守下部小太郎橋門少府佐伯伊  
多智小千余騎を授けられ、西へ日頃思ふと思ふ押勝め、今院宣の下  
る成奉つて太中悦比須波年未著められ、遺恨と暗と、此時なりと、火急出  
陣の用意なり。吉備公の下知、従ひ軍勢を属し、探ふと、急死田原道  
より先廻り、勢田の橋を焼落し、化を張て待たせり。押勝も氣を奇て、道急  
たれとも、落人といひ、殊小女童を引果し、れを左右と道をもる。漸く小勢田ま  
で進著る。早橋を切落し、向ふの岸、小千騎余の敵旗の手を翻し、鬼の星  
を輝して、雲霞のどく陣を張られ、押勝も、仰天馬ひひ、舟有と尋  
し、れも皆敵より切流せしと、覚く、小舟一艘、舟有され、大舟、今、為方なく  
濱つ、ひ、弛て高嶋郡へ、至著、前少領角定、足宅、入少時、長途の勞とど  
休め、其、夜、怪星、押勝、が、財、房、の、屋、上、に、落、る、其、大、き、雍、鬼、の、ど、く、是、を

見し者、眉をひそめ、昔緒葛孔明の軍、管小星、落て、程なく、孔明、先、亡し、其  
不吉の例なり。押勝の滅亡、遠く、と、軍、率、力、を、落し、抜く、小、落、行、者、多、う  
り。斯て、押勝、偽て、道、祖、王、の、凡、塩、焼、王、と、新、帝、と、号し、己が、子、息、真、光、朝  
獮、兩、人、を、心、小、三、位、小、叙し、其、余、の、輩、も、皆、を、れ、く、小、宦、位、を、授、け、日、月、の、旗  
を、造、り、て、押、三、千、余、騎、を、三、隊、小、分、高、嶋、の、西、の、山、を、後、小、あ、て、陣、を、張、り  
官、軍、の、二、將、物、部、廣、成、山、小、添、陸、より、押、寄、日、下、部、佐、伯、兩、將、兵、船、小、舟  
乗、て、湖、水、の、面、小、漕、並、べ、り、去、程、小、押、勝、が、勢、を、廣、成、が、兵、の、押、寄、り、を、行、ふ、に、  
時、矢、軍、一、頃、て、兩、陣、を、物、と、つ、て、入、乱、追、つ、及、て、半、時、を、り、攻、戦、ひ、し、勝  
敗、を、分、る、所、小、廣、成、が、吉、備、大、臣、の、練、針、を、受、て、兼、て、後、方、る、山、寄、の、樹、林、小、軍  
兵、を、伏、せ、た、れ、を、今、戦、ひ、の、決、合、と、見、て、時、分、よ、と、相、國、の、旗、を、  
兵、二、は、小、起、り、近、辺、の、在、家、小、火、を、り、喊、を、發、て、敵、の、後、より、蒼、蒼、地、暗、小、伐、て、



押勝が勢思ひかけあはれ兵小率多し。前後の敵あらず。散  
 小乱し。廣成得たりと緒勢を励。自身真先小馬成進。船小  
 斬立たれ。緒率も主将おはる。勇を奮ふて捲り。多る。押勝が陣  
 いよ。浮足ふかり。進退途を失ひ。濱手敗走。船小。率も有山路。ま  
 落る。有押勝も敗る。味方も誘はれ。濱辺。馳行兵船小。乘浅井郡塩  
 津。とさ。漕せ。る。小。心。ち。悪風吹起り。逆浪船を覆さん。と。る。お。水。主  
 楫取大系。強丸。舳艦。小。馳。廻り。身。と。あ。つ。進。ん。と。れ。も。逆。風。小。吹。込。れ  
 て。高。嶋。郡。三。尾。崎。へ。と。吹。着。ら。れ。る。是。小。後。押。勝。力。た。く。陸。上。と。陸。隊。と。さ。る  
 と。ら。小。佐。伯。早。部。物。部。三。野。大。野。棟。本。小。の。官。軍。各。兵。率。と。率。て。押。寄。喊。と  
 並。發。て。公。方。り。取。率。て。る。小。と。押。勝。陣。頭。小。馬。を。立。新。帝。の。膺。賢。あ。る。と。一。足。も  
 引。と。敵。と。追。捲。り。脚。感。預。見。と。と。呼。り。励。く。下。知。を。う。え。た。れ。と。緒。率。是。小

勵。ま。れ。鏡。の。袖。を。拘。合。し。舟。の。鏡。を。傾。け。て。一。死。族。と。な。り。斬。も。射。れ。も。物。も。せ。と  
 喚。叫。ん。で。挑。と。戦。う。官。軍。多。勢。あ。れ。も。死。憤。の。戦。ま。れ。斬。多。れ。支。度。路。小。成  
 て。ん。え。ま。れ。真。光。勇。ん。で。須。波。や。敵。浮。足。成。と。進。り。伐。や。と。下。知。す。時。も  
 藤。原。藏。下。石。新。兵。と。率。と。並。来。り。敵。の。横。合。り。會。釈。も。な。斬。て。る。勢。以  
 猛。く。攻。ま。れ。え。来。小。勢。と。り。戦。ひ。疲。れ。押。勝。が。勢。又。散。り。小。率。多。し。れ。敗。走  
 と。押。勝。父。子。大。い。お。せ。り。穢。死。者。の。逃。足。の。踏。面。で。斬。散。せ。と。鞍。坪。打。て。下。知。と  
 ま。り。も。耳。中。も。け。と。乱。し。散。を。官。軍。逃。る。追。て。追。結。く。或。討。取。或。公。捕。る  
 押。勝。父。子。今。拒。敵。叶。と。と。方。と。率。破。り。又。船。中。り。乗。て。何。國。を。管。と。め。た。く。湖。上  
 と。落。行。る。と。官。軍。通。さ。と。船。と。陸。と。あ。れ。て。追。り。遂。小。押。勝。が。船。前。後。左  
 右。と。り。圍。と。さ。り。響。結。矢。陣。小。射。症。れ。敵。率。是。矢。先。ふ。り。つ。く。残。り。由  
 小。射。落。され。押。勝。の。矢。を。三。筋。を。り。射。付。れ。る。と。ら。石。村。石。楯。と。り。者。船。り



躍て敵船に乗押勝ふむと組押勝心得りて少時ハ標合々々夫ハ弱りて  
 ひろむとまら石楠遂小組伏て首とを極多。此内小官兵追船と漕寄敵の  
 船に乗移り取高名を顕せり。押勝が勇真光朝搦も今ハ是までなりと  
 刺ちて湖水へ船と矢ふる。後ハ半小敵もかゝるれ官軍皆陸へ  
 上り所へ逃隠し押勝が妻子後類と搜し出と生捕て三千余人塩焼王を  
 も虜小とせり。是ハ依て諸將凱歌と三度揚て都へ凱陣し上皇勝軍と  
 奏し給へ。大ハ御感賞ありて諸將忠賞を給り。別と此度の勝利ハ備大  
 臣の軍略ハ依りて。官一階を進り加増の領地を給り。諸生捕の者ハ悉く  
 せられ塩焼王も押勝が逆謀小ハ意あり。斜免せり。いづれせり。押勝が  
 首ハ大路を引渡して鼻木小肆。其三族と尋搜し皆断罪ハ行れり。押勝  
 が第六男ハ剛雄とて僧あり。是ハ疾より佛道ハ入りて死罪を省め。隱岐の

國ハ流罪ハ行れぬ。其後先年押勝が逆謀奏依て筑紫流罪ハせり。大  
 臣豊成を徵還され流刑の勅書と焼捨旧の官位も復されり。范子言る吏有  
 人富とも貪を忘せざる時ハ能其富と保つ。貴れも賤を忘れざる時ハ其  
 貴を保つ。宜あるも。押勝が如きハ莫大の威福を極めか。猶其富貴を足  
 とせし。橋奢と志あり。君臣の礼と乱し。刺し一時の妬心より。厚た君恩と忘  
 して謀叛を企て遂小身首所を異し。三族と滅せらる。小至る吏是富て貪を  
 忘まら。貴りて貪と忘る者。縋つ。是小就て道鏡が卑賤の身を以て君  
 畜小。尊大の行条。其も行末如何有れと。諸人潜小耳語合々り  
 新帝淡路於彌所崩 神靈路上救危難忠臣吏  
 逆臣押勝已小殊小伏し。其二類も刑ハ行れ。後當今王も押勝が姪も  
 在せ。夜逆小ハ息あべと疑ひ。兵部卿和氣王左兵衛督山村王外衛



の大将百濟王敬福ホ小宦兵數百人を授け平城の旧都ハる中宮院（中宮院ハ）  
 かけられ俄の妻たれを新帝大弼弼（弼弼）あつて衣冠と整へて脚遣も  
 かく侍衛の官人も周障惑ひて逃失脚側（脚側）に従ひざる者もなり和氣王（和氣王）討  
 王詔命を噴て新帝の罪を糾し帝位を刷で大炊親王（大炊親王）淡路國（淡路國）へ送  
 進せざる即ち異の馬に乗せりて右衛督藤原藏下（藤原藏下）名奉行（奉行）配所（配所）送  
 り進らせ淡路の高嶋小幽なる殿造りて押筆（押筆）なる多素（素）り脚側（脚側）小平  
 なる女房もなり近臣も侍む昨日の金殿玉樓（金殿玉樓）小引替（引替）て軒（軒）間租（間租）の板屋  
 漏る沖津汐風脚身（脚身）小ま夜（夜）啼（啼）ると千鳥（千鳥）鷗（鷗）の声（声）小並（並）と去り脚  
 夢も結（結）せむと晝夜脚涙（脚涙）小袖（袖）を絞（絞）せむ末就（末就）て押勝（押勝）が隠謀（隠謀）ハ露（露）る（る）自  
 知（知）むと聊も脚身（脚身）小僻（僻）変（変）在（在）さぬ斯浅（斯浅）猿（猿）丸（丸）嶋守（嶋守）せれ一妻（一妻）の枵惜（枵惜）さよと  
 久（久）むと憤（憤）らせぬ（ぬ）おれ心（心）まる者（者）とく（く）此（此）爵（爵）憤（憤）を暗（暗）さ（さ）る（る）と思（思）石（石）竊（竊）ハ（ハ）配（配）

所を拔出の志と方々剽行のひま小佐伯宿務高屋連早（高屋連早）是を安知て  
 大弼弼死兵士を率て追蒐（追蒐）なる東西南北と尋搜（尋搜）て遂小再（再）以（以）擒（擒）小進（進）せ  
 ちも配所（配所）押筆（押筆）なる（なる）取（取）糸（糸）く番兵（番兵）と付置（付置）多（多）が翌日配所（配所）小（小）薨（薨）逝（逝）下（下）の（の）ひ  
 り実を上皇の命（命）小依（依）て竊（竊）小弼（弼）なりたりとや脚年三十三（脚年三十三）又脚在位僅  
 小六年年号ハ先帝（先帝）繼（繼）の天平宝字と用ひれ別小年号（別小年号）と（と）な（な）し脚位（脚位）を廢  
 淡路（淡路）へ流罪（流罪）しぬ（ぬ）以（以）て淡路の廢帝とハ（ハ）ヤ（ヤ）わり無実（無実）の虛名（虛名）を蒙（蒙）り  
 浅猿（浅猿）配所（配所）小萌（萌）のひ（ひ）なる痛（痛）く（く）り（り）る保良（保良）の都（都）ハ（ハ）小新帝（小新帝）と廢  
 のひ高野皇重（高野皇重）ね（ね）玉（玉）祚（祚）を踐（踐）ぬ是（是）補德天皇（補德天皇）と（と）なり年号（年号）と天  
 平神護（平神護）と改元（改元）ありたる是皇極（皇極）春明（春明）二帝（二帝）在（在）せども二（二）称号（称号）ある例（例）小依  
 の人（人）とと天皇再（天皇再）び九五（九五）の位（位）を踐（踐）のひ（ひ）て（て）倍道（倍道）鏡法師（鏡法師）脚愛幸（脚愛幸）あり（あり）太止  
 大臣大禪師（大臣大禪師）の高宦（高宦）と授けぬ三公九卿（三公九卿）の上（上）も（も）な（な）れ（れ）を道鏡（道鏡）大弼（大弼）小（小）驕（驕）慢（慢）ハ



心増長大臣をさる更士茂のてい己不斐ふ者ハ功多れも官位を進り己不阿  
らざる者ハ罪なれも官と損し禄を減しけるも百官疫神のごとく恐まて心  
中の忌悪とも表ふハ皆尊敬して這はくおひなる天皇さる道鏡小法白王の尊  
号と賜りたる道鏡弥君電小辨り錦綉小纏を八珍小飽奢程とて  
極むる更もたの猶も足更とあむ何率王位小昇り天下と掌握して先祖と  
耀り子孫と賑さん及びあれた望も成殺り多と不敵なる此時右大臣豊  
成押勝が凡たれとて右大臣と止れ下道吉備と左大臣と藤原永平を  
右大臣とせしむる誠吉備大臣ハ文道武道小達唐主小博才の誉と揚  
一名臣たれも孝練天皇の侍續となり太宰府小學校と設り此人の功あり  
始賤宦の身なりも追く小位階を進み遂小三台の高宦小登庸せられ朝  
廷の朝政と佐る身とたれも未例たれ立身なりける賢臣めれ道鏡

が君の威光を甲小彼て大臣と直下王莽董卓が篡逆の色と會々多と量  
知しこれとも時の勢の制さる更能とも詳とよそふく其成行果を窺  
しける天平神護元年三月越智泰澄寂と越前の白山茂閑た各僧  
たり同年勝道とり僧下野國二荒山を閑今日光中と稱し又和歌小を  
里山とより日二年大学助教膳臣大丘奏聞しける唐主の帝王と乳  
子と崇ちて文宣王と稱しる願くハ皇國小ても其例小任せ孔子と文宣王  
と稱し度より願ひを即ち勅許ありける是より倭國小て孔子と崇ちて文  
宣王と稱しる日三年正月天皇道鏡を愛し重介の西宮の前殿小住  
しられ百官小拜賀せられける道鏡推威偏小帝王のごと満朝り  
群臣渠と恐る更乳虎のごと其崇と受と皆阿利彼の拜趨して媚とけり  
り慈小太宰府の神宦阿曾六呂と名者道鏡の意小脇人と飽と媚始



ひと言を尋ね、某宇佐八幡の託宣を蒙り、其神託の事むら、今道鏡法皇の  
王位を禪りむら、天下泰平、國大の豊饒なる事、其の御告のいと真しく、  
奏状を書き捧げ、道鏡大の悦び、即時小天皇、奏状の事むらを執奏  
し、阿曾大旨小の多くの金銀絹帛とをよめる。天皇、道鏡を愛し、其最とも  
甚だしとの事、王位の事、容易あぬ、天下の一大事なれ、阿曾大旨、奏状の事  
以て御讓位あらん事も成らぬ。今、應宇佐、勅使をよ、上、愈神託相違ある  
於て、天津日嗣を讓る事、と勅詔なり、その事、道鏡も理小伏し、その事、宇佐、  
勅使とよ、神慮と伺せ、その事、よ、天皇、右大臣吉備とよ、宇佐、勅使、  
よ、命、下、擇む事、と命、よ、吉備公、勅命と奉り、退て思ひ、今、  
の勅使、戒、朝家の一大事なれ、普通の者、遣い、智勇と兼備する大  
忠臣あらむ、心を大吏と過る事、心を困、群臣の中、維彼と勸考らむ、

和氣清大旨、智勇兼備、正直廉貞の忠臣なれ、此度の勅使、清大旨の  
如者、有、その事、と旨、定め、其由、天皇、奏し、や、それ、即ち、清大旨を  
出され、勅詔有る、太宰府の阿曾大旨、不思議の神託を蒙り、然れども  
王位を禪る事、吾國の一大事なれ、阿曾大旨、表書の事、よ、定め、その事、神  
託を疑、よ、似れ、よ、你、筑紫、下向、宇佐八幡宮、奉、奉、今、應、神  
託を伺ひ、歸る事、となり、清大旨、敬んで、勅命と奉り、君前、退れ、私宅、歸る  
事、其、夜、道鏡、清大旨を西殿、招れ、旅行の餞別と号し、山海の珍味と網、重  
く、卿、食、應、其、上、數、多、の、珍、器、重、密、金、銀、亦、引、出、物、と、諸、左、右、の、女、房、と、拂  
ひ、清大旨、近く、招れ、御、迎、此、度、宇、佐、の、奉、使、小、立、事、多、事、  
多、事、  
や、不、  
せ、ん、よ、我、帝、位、小、即、ち、御、邊、を、太、政、大、臣、小、執、  
領、國、其、望、小、任、  
二二



心得違を奏し、急三族を夷ぐ。天下の政道を専ら握り、一門の敏子孫の富貴を針も。九族の滅亡を招き、只脚辺を一言の中あり、依てよく分別して出させしめ、或は或は劫して討の懸とけえ、清丸の解承伏せ、体とて暇を乞、松宅へ入り、後道鏡より得る金銀重器を唐櫃に納り、堅く封印を付、諸族を載正日勢に従へ、都を啓行し、清丸が真逆の朋友、真人豊永とく者、清丸を見送りと、途中別れの酒を酌り、偕習る、武王無道の紂王を伐て天下を保し、伯夷兄弟はを愧し、義周の粟を喰ふと、遂に首陽に餓死せしむ、況や神國の粟を食ふ者、彼姪僧天位を犯さむ、大丈夫者、何の面目有て、其下風小を履、其時ハ我今の伯夷と、帝下之意ハ奈何と言、清丸微笑して天を指し、皇天明きて日月未と地を浴ぬ、豈に慮る、其の技と、言、豊永大に、始、我足

下小及むる、更遠として、拜謝して、別する、清丸を、道次急だ、其紫へ下り、宇佐の神官の館小着し、七日間沐浴齋戒して、心神を淨め、社壇に参詣して、敬んで幣帛を奉り、徐小宣命と、讀上、依頭平身して、祈念する、今般乃奉幣ハ天下の二大、更ふて、心を、俯て、願ハ正幡宮の奇瑞を著し、神託を示し、丹誠を凝して、祈り、八幡宮も、清丸の忠誠を感納在、久忽ち、神威鳴動し、社壇の扉を、げ、開、錦の御戸、帳垂る、内陣より、金光輝れて、其光朝日、の影、彷彿、清丸此瑞現を拜見して、信心肝銘し、猶も拜伏して、御託宣を待、内八幡宮巫女小乗、移り、の覚、十三、神あり、巫女俄小身を、戦、突、上、其音、響、其行ハ、天照皇太神の神慮、小、適、時ハ、王位を、踐、多、更、能、又、賢、良、其、と、臣、下、の、身、を、以、て、帝、祚、を、嗣、人、更、思、ひ、増、て、況、や、無、道、姪、醜、の、妖、僧、主



尊の密位を望むるや故に神靈怒りて其祈を散む。你早く帰洛して神託の旨  
成偽り飾らむ有の依小奏せよと。嚴重告の事とひく。巫女噓と侍人更を覺  
る体なり。清丸著明なる神勅を奉りて感涙小狩衣の袖を絞り。替首再拜  
して畏り成り上る内巫女よ。正氣不及る清丸八竹並とて社壇を下り。神宮の證  
歸るとひく。願小旅装と整へておま道路を急死と歸京。私宅へ歸らむ  
旅装のまゝおま。参内しを執奏の官人斯と奏聞や。多小依て天皇高座小出脚  
か。の。是小より公卿の面々相結て列座。清丸が回奏如何と。皆戸漣と吞耳を  
澄しとて聞居る。道鏡清丸が飯落せと。安より。浪波我望と。達と。時節三未  
せり。渠小ハ多くの引出物をとせ。高官と授く。由中安せられ。必定我へ讓位有  
む。との神託なりと。奏聞と。空頼。錦綉羅綾の袷束刷ひ。金造の長死不  
刀と帶及し。昇殿して御簾の左の小七室と。鏝め。倚子と。立させ。堂々と。腰掛り

清丸が回奏遅しと待小る。時小清丸玉座小向ひ拜を。さ首と擡色成平と奏  
し。臣勅詔を奉りて。宇佐八幡宮。奉幣仕り。神託を伺ひ。す。り。と。社  
壇鳴動。扉あつて。内陣より金光輝れ。と。等。神靈巫女。秘す。て。託  
し。ひ。る。八。五。皇。國。の。天。津。日。嗣。の。神。代。の。昔。より。皇。孫。小。傳。来。り。た。ひ。皇。統。乃。君  
り。と。其。行。ひ。天。照。皇。太。神。の。神。慮。小。適。ひ。ま。る。時。ハ。帝。祚。を。嗣。ひ。ま。更。能。す。又  
賢。良。な。り。と。も。臣。下。の。身。と。て。王。位。を。犯。し。更。思。ひ。ま。る。と。増。て。況。や。無。道。姪。配。乃。者  
小。於。老。故。小。神。靈。怒。り。て。其。祈。を。散。む。此。昔。歸。洛。と。有。の。依。小。奏。聞。せ。り。と。告。む  
ひ。く。神。ハ。上。を。も。ひ。ゆ。と。言。半。句。の。旋。と。な。り。少。も。憚。る。色。なく。奏。聞。し。る。小。と。天。後。甚  
ふ。と。穩。う。あ。ら。む。何。更。も。且。む。と。御。簾。成。ら。と。下。と。帳。内。小。入。脚。なり。満。座。の。公。卿。身  
小。冷。汗。を。流。し。互。小。面。を。見。合。と。默。然。と。是。小。依。て。堂。上。堂。下。鳴。と。鎮。て。音。せ。せ。と  
道。鏡。ハ。大。小。怒。つ。と。眼。血。と。と。面。色。赤。く。なり。又。書。く。なり。大。刀。の。柄。を。確。る。許。り。小。握



七 齒を切り火のつゝの滔息と吐清丸の面を嚙と睨と。われ偽奴先小太宰府乃  
 阿曾丸平正神託有る小。今又も不肖の託宣有るや。是已が作彼け偽り  
 と女言小て信むる小足む。勅命小背とてい我を無道淫醜と罵る余奇怪の白癡  
 くの見よ。己が五臓を劈死九族まで刑罰せむと躍とつて散く小罵り。席を  
 蹴立て真殿へ入天皇帝勸めて急だ清丸匹夫半裂衣。妻子後類と申市小  
 曳出して刑戮のえと奏々れども天皇逆鱗ハ強く在せども。流石宇佐八幡の神慮の  
 徑を恐りひと死罪を免。遠嶋へ流罪小行小免。勅詔のふと。道鏡心中小  
 飽足されども力なく不肖と承詔。怒氣止むを清丸を穢し呂と改各させ  
 左右の脚の筋を断りて壁と。大隅の海濱へ流すと命。張典小乗て都へ出  
 竊小警言固の武士小命。路次小刺殺と下知。是小依て武士ども  
 清丸の軍典を下更小昇せて津の國芥河小。此所小矢ひてと典と昇是と

せたる小俄小天を曇り。暴風吹大雨降出。雷電鳴閃きて。今も頭上へ落くる  
 魚の勢ひわれ。武士ども戦慄して刃も抜得と免首小成て瘡々たる所。真人豊永  
 飛馬小鞭を加へ。蒐来り太京小。你们清丸を過ちなく守護と配所へ送まよ  
 途中小実母が罪三族と夷ぐ。右大臣殿の告状是ふありと呼り。告  
 文残り出と續せせられ。武士ども大恐。命令と背く。由中害心を止め  
 たる小不測や忽雷鳴止雨も漸く。真入豊永典の内なる清丸小對面  
 一。足下朝家の為小其身を志す。妖僧の逆威と恐む。直言と以て神託を奏。皇  
 統を紊れとむる。更滅小朝廷の本忠臣と縋つ。然小君道鏡小魂を奪れ  
 り。足下と遠嶋へ配流。由更難く小余あれ。時の不肖小余何とも志す。さもあれ  
 皇天足下の誠忠と照覧。由遠くを思免の脚沙汰ある。時時之艱苦と堪忍  
 ひて。飯浴の期を待りて。鍊められ。清丸も豊永も厚志を感謝。互小再會と約





道行  
七人  
...



豊永

和...

合...  
...



袂をもちて豊永都を引返す。斯て清丸の危難を免きて張典ふれ配所  
 の大隅へ赴れども路次をなれ宇佐八幡へ参詣し一夜赤竜して朝廷の安寧を祈  
 り且我身の飯浴を願ひる小奇あるか何方よりともあつて二尺許の小蛇出果し  
 て清丸が断まじる兩脚の疵を一向小嘗多ふと兩所の金瘡一夜の内小痊て行步  
 旧の如く自由なりと不思議なる清丸奇異の思をた。是余八幡宮乃神  
 助小依と云なりと感涙を流し神供と献し祝詞を上て神恩を謝し宇佐と  
 云く遂小大隅の配所おる者小なる。茲小朝臣藤原百川が清丸が忠節を深く  
 感し其身の所領備後國小有れを其半と分て清丸の配所贈りる小と清  
 丸配所小繕居まるといふ。衣食も小足て萬不自由なく安んじて日月と送る  
 光仁天皇御即位 道鏡於配所餓死條  
 神護景雲四年庚戌二月 称徳大皇河内國由義の宮へ御幸なりひる道鏡

如何なる所存や有久異れ食物を長壽の御業なりとて天皇進めたりる小  
 君へ御電愛深れ道鏡が献する食物也聊も疑ひむと快け小食りひる小  
 とれ何となく玉體忙しくあせり都還御在りても朝政を聴くも更むなく  
 御怒次第小重らせりひるを医宦の面々種々良方と考て御業と献まとも敢  
 て其驗なり近侍の女宦をも近付むと只三位吉備の由利とり臣のと奏とべき  
 更あれ御病林へ参りて更奏する道鏡ハ昼夜天皇の御側お在る倍我  
 意に震ひるもど諸卿薄氷と踏てく恐き危ぶる其年の八月小天白藤原  
 崩御なりひる宝篋五十三支前後世と知ると十六年わり尊嚴と大和國添下  
 郡佐賀御高野の山陵小葬りされり時小皇太子いまだ定ずりおられ左大臣  
 臣藤原永平右大臣吉備諸卿と集り何事の皇子ハ帝位小即すべと  
 評議ある小衆議區くめて更一決せむと藤原百川藤原良経と心を



合して天智帝の御孫白壁王とて聖明の君たり彼皇子小室位は継せり  
頻て言えぬ永手吉備の西公実もとて遂小白壁王と十善の帝位は承  
つりたり是君を四十九代光仁天皇と申なる御父は天智天皇の皇  
子御母は紀椽姫とて贈太政大臣諸人の御女たり年号と宝龜元年と改元  
し備光仁天皇朝政を聴り始ふ坂上野田九兼て弓削道鏡が君電と  
甲小被て我意の行条を深く憤り其罪と紛らふより帝も道鏡  
が奸悪を兼て思せり由は死刑申と思召れども先帝の御重愛深かり  
者あれは陵の土も新ある小刑戮不行人も御霊への悼り有とて  
一等と宥下野國流し茶師寺の別當とせし其舎弟弓削浄人と土佐  
國(瀛)の道鏡は先帝の陵の側小居を構て柵と藤原楓九勅命と  
奉りて弛向ひ宣命と續せ道鏡が身小纏羅綾の衣服を荒けり

刷り木綿の衣服太布の墨の衣と著せお申の張樂乗て緊く警固の武士  
小守を配所へ送りける噫浅猿丸は先帝御在位の内權勢肩をさぶる  
者もたつ橋者王候小擬し群臣の上小跋扈て猛虎の羊群小在が如し  
も忽ち二個の罪囚と成て回狭を牢典小乗らま二人の従者もなかつさふが  
飢る大の腹をれすお比り糸を緒人指し唾吐して悪く笑ひぬ者もたつたり斯  
く下野國茶師寺にお著し板間まの仮屋押筆監率と付て嚴く  
守せ楓丸と都と歸りける是より道鏡は別當とて八伎の名も朝夕些少  
の麩食を食むりて湯水で思ふ飲更能はさすも花麩を食せ  
し金屋玉殿小錦綉の袴と袂け數多の女官小傳と八珍の膏味小飽し  
今ハ盧生が益受と覺し昔と又今と恨る天野の程と哀れりける  
身とかりとも猶露の傘と捨も得ずと九夏の日も涼風と迎る便もたつ



冬ふゆの寒さむく夜よも炉火いろを求もとむべ能あたむべ。凍餒とうじやう辛あつ苦くなるべ。更さら三さん年ねん中ちゆうて。終つひ小こ伎ぎ屋やの  
裡うち小こ餓が死し。却かへ統と都と小こ光かう仁に天てん皇わう政せいを聽きひき更さら正ただしくき道みち鏡かがみ足あし弟あにを  
摘と罪つみす。其その縁えん類るいをとれく小こ刑けいのひ小こ就きても和わ氣き清きよ九くが直ちやく言げんの忠ちゆう節せつとも睿  
感かんありて。大おほ隅すみの配はい所しよよりき徵めい還えんされば正ただ三位さん大だい納なつ言げんの任にんのひ重おもくも賞しょう禄ろくを給り  
其その誠まこと忠ちゆう成せい頭かぶのひをき清きよ九く愁しゆう眉まゆを用れば大だい小こ欣きん悦えつしても天てん思しとも畏おそりさ  
茲こゝ小こ光かう仁に帝ていの御み后ご井い上じやう皇わう后ごとも帝ていのひ皇わう子し小こ在ありて在ありし時とき井い上じやう内ない親しん王わうとも  
君きみの御み竟けい愛あい深ふかくも他ほか戸と皇わう子し降くだ誕たんのひが君きみ御み晩ばん年ねん六む十じゆう天てん位い小こ即すなはちて  
井い上じやう内ない親しん王わうとも皇わう后ごとも他ほか戸と皇わう子しとも太たい子し小こ在ありて在ありし時とき小こ白はく后ご帝ていの御み竟けい愛あい  
漸かたくも小こ薄はくきも夜よの御み幸さき枯かくもならせりのひをき貴たかしも賤ひそきも嫉しやく妬と婦ふ人にんのありし小  
皇わう后ごとも枕まくらの座ざ乃すなはちて積たまる恨小こ妬と心しんを生じす帝ていとも御み中ちゆう睦ぼくとも遂つひ小こ大だい惡あく心しん  
と起おこしすのひ小こ宝ほう亀き三さん年ねん夏げの頃ころ洛らく中ちゆう洛らく外がいの神しん社しゃ佛ぶつ圖と凡おん咀その願がん文ぶんを捧たもて帝

調てう伏ふくすも。早はやく崩くずれ脚あしをせましせり。太たい子し他ほか戸と皇わう子しとも帝てい位い小こ即すなはちて巧たくともひ  
々た々たとも恐おそるも。其その義ぎ深ふかくも穩うま密みつならすも惡あく吏し千せん里りとも走はしるもひは遂つひ小こ大だい惡あく心しん  
更さらを參さん議ぎ藤ふじ原げん百ひやく川せん出でとも大だい小こ狭せうたら神しん社しゃ佛ぶつ圖と捧たもてりの凡おん咀その願がん文ぶん  
を取と集あつめり。帝てい奏そう聞きおとびたれば天てん皇わう大だい小こ逆ぎやく鱗りん在ありて。皇わう后ごのひ他ほか戸と皇わう子しとも  
押おし嵩かみのひ小こ死し罪つみ行ゆくも勅ちやく詔みづからありて左さ大だい臣しん永えい手て右みぎ大だい臣しん吉きち備び下げ  
の緒いと大だい臣しん百ひやく般はん陳ちんめもなりも也なり。漸かたくも死し罪つみ一いつ等とうとも思おも免めんあつても皇わう后ご太たい子しとも其  
位いを廢しても庶しよ人にんともなりも斯かくても儲たくら君きみを嗣ひたるも日ひ年ねん八はち月げつ帝てい群ぐん臣しんを徵  
集あつめりのひ何なにもの皇わう子しとも皇わう太たい子し小こ在ありて在ありし時とき勅ちやく詔みづからありて皇わう后ご太たい子しとも其  
親おん王わうとも春はる宮みやう小こ在ありて在ありし時とき其そのもも宜よろしきとも群ぐん臣しんを徵  
集あつめりても汝な女にょ居いるも小こ百ひやく臣しん座ざとも列れつとも互あひ其そののひとも見み合あいはせりとも言げんひきひき  
とも人ひとをたらしても藤ふじ原げん百ひやく川せん位い進すすみ出ても奏そうへりとも山やま部ぶ皇わう子し八はち弟あに一いつの皇わう



子とや。珠小賢徳す。まを更緒人の知とらなる。況や嫡を立庶とさす。や。和漢古  
今とも通義あれ。彼皇子と太子小立のらんを理の當とていふ。下とや。藤  
原演成進。出不と山部皇子。脚母の素姓卑し。春宮小立。か。人更如何  
あ。二弟の皇子。稗田皇子と太子小立のふ。と奏し。是より緒卿との具  
肩の皇子女を勧めて評議更小決せ。百川眼と怒。齒を切て曰。太子と立。小  
更を徳と論。母の貴賤を論せ。ゆ。腹は食物なり。古の大舜禹王。皆  
賤れ人なれども。唐堯唐舜。其賤れを論せ。其徳を好して天下と禪す。凡一  
天の君の世嗣を定む。天下万民の爲。思愛私の爲。依令脚母乃素姓  
貴とす。其徳薄く。天下の人民伏し従ふ。誰と俱。天下と保ち。ふ。會死  
脚母賤くとも。脚身小賢徳在て。天下の人民懐れ従ふ。四海太平。小室祚長。久成  
聖。山部皇子。脚嫡子と。聰明睿知。小在せむ。天下万民悦伏と。何ぞ脚

母の素姓小拘らんや。と言。暴多む。其理小伏。人も有。左右異論。區々。一決  
せ。れ。君も脚退屈在。其日の評議。止。ひ。入脚。か。ひ。多。れ。緒卿も皆退  
出せ。れ。多。る。百川。人。を。取。て。座。を。起。む。或。人。不。審。何。ぞ。小。退。出。せ。れ。と。向。小  
百川。声。を。厲。し。立。太子。の。評。議。ハ。天下。の。大事。なり。山部。皇子。と。太子。小。立。の。追。我  
此。殿。中。と。固。く。退。く。依。令。不。敬。の。罪。と。唱。れ。百川。が。命。を。徴。す。と。國。の。為。小。捨。る。命  
露。わ。い。も。惜。む。と。と。一。寸。も。動。む。是。小。依。て。其。問。も。人。も。為。方。なく。捨。置。て。退。散。  
々。是。より。度。く。立。太子。の。脚。評。議。有。多。れ。も。猶。決。せ。と。百川。を。始。の。と。山部。皇子。と  
勸。めて。止。む。殿。中。小。有。そ。と。四十。余。日。其。間。晝。夜。少。も。睡。眠。せ。ず。東。帶。け。終。涼。也。に  
て。座。し。た。れ。帝。も。其。志。の。金。鉄。の。ぞ。く。変。せ。ざ。ら。ん。感。の。ひ。て。遂。小。山部。皇子。と。立。  
太子。の。宣。旨。と。下。し。ひ。たり。後。小。桓。武。天皇。と。や。此。皇。子。か。り。噫。忠。か。る。る。百川。願。家。の  
為。小。死。を。恐。ま。と。官。祿。と。入。る。更。庭。の。ぞ。く。強。練。の。患。前。和。漢。と。い。ふ。例。を。聞。む。



後代臣下する者の龜鑑と謂つる。桓武天皇のよき天下と云ひのふりも、此の百川公位に  
 練りなまりし依り此百川といふ參議正三位藤原宇合卿弟八男にて幼稚の時よ  
 量器量衆人勝る。桓德光仁一帝の事、參議中衛大將從三位の官位に登  
 る内外の政を補むといふ更なり。密龜十年七月春秋より小四十八才にて卒去せり  
 光仁帝甚だ悼惜せし。從一位小贈官あり。是は且かれ彼井上皇后他  
 戸皇子八位と損され庶人と追下られし。無念の月日を送り遂に憤死せし  
 其悪逆種々の祟となりたる也。叡山の最澄師の之。桓武天皇小孫  
 一社の神鎮祭りて其怨霊の憤り成る者なり。今の御霊八社の内の社は之  
 因に云山城国高難山神護寺に元来和氣氏造立の寺院あり。此和氣社と云ふは清登卿  
 と發りし此卿延暦十八年己卯卒す。今茲嘉永四年三月十五日壬午卒す。御事依て  
 朝廷より勅使下向りて正一位と贈りて護王大明神と云ふ神号を賜はる。實は御事依て天日  
 杖桑皇統記前篇卷之四畢

萬餘



